

睡虎地秦簡《語書》釈文注解(下Ⅶ)(完)

十四、其畫最多者、當居曹<sup>(4)</sup>令丞、令丞以為不直<sup>(5)</sup>、志千里使有籍書<sup>(7)</sup>之、以為惡吏。

語書<sup>(8)</sup>

其の畫すること最も多き者は、當に居る曹、令、丞に奏し、令、丞以て、不直と爲せば、志して千里に籍有りて之を書かしめ、以來惡吏と爲さむ

語書

(1)畫 《單行本》は、「讀为過。《呂氏春秋、适威》注、過、責。」とする。いま因みにカールグレンと周法高による過と畫の復原音を掲げて見ると、以下の如きであるが、これで見ると、畫と過とはそんなに酷似しているとはいいがたい。子音、母音とも、去声、入声にかかわらず異っている。《呂氏春秋、适威》に、「煩爲教而過不識、數爲令而不從、巨爲危而罪不敢、重爲任而罰不勝」(煩爲教而過不識、爲して、識らざるを過め、數々令を爲して、從はざるを非り、巨に危を爲して、敢えてせざるを罪し、重く任を爲して、勝へざるを

		カールグレン 上古音	カールグレン 中古音	周法高 上古音	周法高 中古音	反切
畫 <sup>1</sup>	去	g'wěg	rwai	grweə	ruæi	胡卦
畫 <sup>2</sup>	入	g'wék	rwek	grwek	ruæk	胡麥
過 <sup>1</sup>	平	kwā	kuā	kwa	kua	古禾
過 <sup>2</sup>	去	kwā	kuā	kwa	kua	古臥

高橋 庸一郎

罰す」とあり、その高誘の注には、「過、責」(過は責むなり)とある。また《廣雅、釋詁》にも、「過、責也」とあるし、《楚辭、惜往日》にも、「信讒諛之溷濁兮、盛氣志而過之」(讒諛の溷濁なるを信じて、盛んに志を氣して之を責む)の蔣驥の注にも「過、督責也」とある。故に過に責の意味が含まれているということは確かであるが、しかしここで畫が責の意を持つというのは、畫と過が音の上から通用するという証明がなければならぬ。しかしそれは上に見て来たようにあまり的確に断定出来るものではない。《說文通訓定聲》には、「畫、段借爲過」(畫は段借して過と爲す)とあり、また《春秋穀

梁伝、桓六△に、「寔來者、是來也……其謂之是來、何也、以其畫我、故簡言之也、諸侯不以過相朝也」(寔に來る者は、是れ來るなり……其の之を是れ來ると謂うは何ぞや、其の我を畫するを以てす、故に簡にして之を言うなり、諸侯は相い朝するに過ぎるを以てせざるなり)とある。しかし《說文通訓定聲》では、過るの意味であり、また《春秋穀梁伝》の方も後文に過字が使われている所を見ると、この場合の畫もやはりこれに近い意味で用いられているのであろう。杜預の注も、「畫、是相過」(畫は、是れ相い過ぎるなり)としている。こうしてみると畫は、この字そのものに責という意味がある訳ではなく、何か別の基本的な意味が存在していて、その敷衍された意味としての責の意があるのである。

畫は《說文》には、「界也、象田四界、聿所以畫也、凡畫之屬皆从畫、書古文畫省、𠄎亦古文畫」(界なり、田の四界を象る。聿の畫する所以なり。凡そ畫の屬は皆な畫に从う。書は古文の畫の省、𠄎も亦た古文の畫なり)とある。即ち畫は境界のことである。領田の四方を練びきして界を確定させるのである。この畫の字の下部の田の部分に左右下と三線で囲まれている字が《說文》の題字に見えるのは、それを表わしているのである。結局現代漢字の画は、この《說文》本文の下部のみを取り出したものである。聿は本来、手、手は手に棒状のものを握っている象形である。その下部は、その棒状のものによって折られ分割された二本のラインを示している。即ち手に握られた棒は、棒ではなく何等かの刃のついた小刀であらう。畫は小刀でラインを分割するように、田領の四方を境界線で区分す

ることを言うのである。《說文》は、「劃も亦た古文の畫なり」と言っている。畫字の中には已に小刀が含まれているのに、更に刀を加えるのは無用に思われるが、実はこうした例は他にも多い。例えば正字は、本来城廓へ向って進んで行く人間の足を象ったものであり、正字そのものに、行くの意味が含まれていたのが、時代が降るとともに、正字は他の意味に用いられるようになってしまったために、正に改めて行人偏を付して、本来の正字の持つていた行くの意味を征によって表わすようになったのである。

畫と劃とは同意であるということが《說文》の記述から理解出来るのであるが、それから考えると、畫は他と区別する為に、その対象物に対して何等かの切り込みを入れて区別するということであらう。畫が過(すぎる、よぎる)と通じているのは、その区別の為のラインを引くこと、そのラインが眼前を横切るところから伸引されたものであらう。畫は現代風に言えばチェックを入れるということである。この《語書》の場合は、悪吏と目される行動が露われれば、その度にチェックを入れ、そのチェックが最も多い者は、ということであらう。

(2) 奏 《說文》に、「奏進也、从𠄎、𠄎上進之義」(奏進なり、𠄎に从い、𠄎に从う。𠄎は上進の義なり)とある。段玉段は、最初の奏字について「此複舉字之未刪者」(此れ複舉の字の未だ刪ざる者なり)としているから、奏とは進の意と考えてよいであらう。《說文》は、𠄎が上進の義であるとしているが、恐らくそうではない。𠄎は前にも掲げた如く、《說文》は「艸木初生也」(艸木の初めて

生ずるなり」としており、艸字の半分、つまり草のことである。草を両の手で奉げ持っているのである。進の意は、寧ろ下部の天にある。傘は《説文》に、本で取ってあり、「進趣也、从大、从十、大十猶兼十人也」(進むこと趣きなり、大に従い、十に従う。大十は猶お十人を兼せる也)とあり、段注には、「趣者、疾也、言其進之疾、如兼十人之能也」(趣とは、疾なり。其の進むことの疾きこと、十人の能を兼ねる如きを言うなり)とある。よつてはやく進むことを本というのである。また《説文》には、舛字があり、それに対しても許慎は、「進也」とし、また舛字についても、「疾也」としている。更に許慎は、皋について、「气皋白之進也、从伞、从白、禮祝曰皋登譌曰奏、故皋奏皆从伞、周禮曰、詔來鼓、皋舞、皋告之也」(气白の進むなり、傘に従い、白に従う。禮に曰く、祝は皋と曰い、登譌は奏と曰う。故に皋奏は皆な傘に従う。周禮に曰く、詔して鼓を來たらしめ、舞を皋げしむ。皋は之を告ぐるなり)とある。以上からみても傘、或いは本にはすすめる、告げ申し上げるの意味があることが解る。ただ皋字の場合は上部の白字に已に申し上げるの意味がある。《説文》は白について「此亦自字也、省自有詞言之气从鼻出與口相助也」(此れ亦た自字なり。自を省するは、詞言の氣鼻より出でて口と相い助くるなり)とあり、更に自については、「鼻也、象鼻形」(鼻なり、鼻の形を象どるなり)とあるからである。

(3)當居曹 《單行本》は、「應即古書中的當曹、指惡吏所在的衙署、」(古書の中に見える當曹のことであり、惡吏が居る所の役所を指している)とある。當曹については、《北史》、魏紀三、高祖《》に、

「三載考績、自古通經、三考黜陟、以彰能否。朕今三載一考、考即黜陟、各令當曹、考其優劣爲三等」(三載績を考えるに、古より經に通じ、三たび黜陟を考え、以て能否を彰かにす。朕今三載に一考し、考すれば即ち黜陟し各々當曹に令して、其の優劣を考えて三等たらしめむ)などに見えるものである。黜陟とは、《書》、舜典《》に、「三載考績、三考黜陟幽明」(三載績を考え、三考して幽明を黜陟す)とあるもので功なき者を降格し、功有るものを昇格させることである。

(4)不直 不正、不公正のことである。《單行本》の注に、「是秦漢時吏常有犯罪名、見《史記》、秦始皇本紀《》、《漢書》、張敞傳《》等」(秦や漢の時代に吏によく使われる罪名である。『史記』、秦始皇本紀《》や『漢書』、張敞傳《》などに見える)とある。しかし《始皇本紀》にあるのは、「三十四年適治獄吏不直者、」(三十四年、獄吏の不直なる者を適治す)である。これは不直が罪名と解されるかどうかは解らない。この部分には索隱も集解も附されていない。また《史記》、董仲舒傳《》には、「不正不直」の語も見え、同じく《史記》、淮南衡山列傳《》には、「王使人上書告内史、内史治、言王不直」(王の使人上書して内史に告す、内史治めて、王不直なりと言ふ)ともある。これ等も罪名とは思えない。《漢書》、韓延壽傳《》には、「上由是不直延壽、各令窮竟所考」(上はに由り延壽を不直し、各々考う所を窮竟せしむ)の例がある。これは直を動詞として用いたもので、不直はその否定である。つきこの場合の直は任官するということであり、不直は任官を解くことである。

(5) 志 《説文》に、「意也、从心、之聲」とあり、意については、「志也、从心、察言而知意、从心、从音」(志なり、心に从い、言を察して意を知る。心に从い、音に从う)とあつて互訓になっている。《侯馬盟書》や《中山王壺》の銘文中に使われている志字を見るとその上部は足裏の形、つまり止字となっている。これは心の趣くことを表わしたものであろう。即ち志とは、趣く心を表わした字である。《説文通訓定聲》には、「志此字、大徐補入説文、爲十九文之一、云云、按、即識字之古文」(志、此の字、大徐は補いて説文に入れ、十九文の一つと爲す。云云と、按ずるに、即ち識字の古文なり)とする。段玉裁は、「周禮保章氏注云、志古文識、蓋古文有志無識、小篆乃有識字、保章注曰、志古文識、識記也、哀公問注曰、志讀爲識、識知也、今之識字、志韻與識韵分二解而古不分二音則二解、義亦相通、古文作志則志者記也、知也、惠定于曰、論語、賢者識其大者、蔡邕石經作志多見而識之、今人分志向一字、識記一字、知識一字、古祇有一字一音、又旗幟亦即用識字、則亦可用志字、詩序曰、詩者志之所之也、在心爲志發言爲詩、志之所之不能無言、故識从言、哀公問注云、志讀爲識者、漢時志識已殊字也、許心部無志者、蓋以其即古文識而識下失載也」(周禮の保章氏の注に云く、志の古文は識なり、蓋し古文に志有りて識無し、小篆乃ち識字有り、保章の注に曰く、志の古文は識なり、識は記なり、哀公問の注に曰く、志は讀みて識と爲す、識は知なり、今の識字、志韻は識韵と二解に分けるも古は二音に分たざれば則ち二解は義亦た相い通ず、古文志に作るは則ち志は記なり、知なり、惠定于曰く、論語に、賢者

は其の大なるを識る者なり、とあるを蔡邕石經では、志多く、見て之を識るとする。今人志向の一字、識記の一字、知識の一字に分かつ、古は一字一音有るのみ、又旗幟に亦即ち識字を用うれば則ち亦た志字を用るも可なり、詩序に曰く、詩は志の之く所なり、心に在りて、志<sup>こころおもひく</sup>ために言を發して詩に爲る、志の之く所は言無きこと能はず、故に識は言に从う、哀公問の注に云く、志は讀みて識と爲すは、漢時志と識は已に字を殊にするなり、許の心部に志無きは、蓋し其の即ち古文の識を以つてして、識の下に載を失うなり)とする。因みに識字を《説文》は、「常也、一曰知也」(常なり、一に曰く知なり)とし、段注は、「常當爲意字之誤也、草書常意相似、六朝以草寫書追草變、眞譌誤往往如此、意者志也、志者心所之也、意與志、志與識古皆通用、心之所存謂之意、所謂知識者此也、大學誠其意即實其識也」(常は當に意字の誤なり、草書の常、意は相い似たり、六朝は草を以て書を寫し、草變するに追ふ、眞譌の誤は往往にして此くの如く、意なるものは志なり、志なる者は心の之く所なり、意と志、志と識とは古皆な通じて用いられるなり、心の存する所、之を意と謂う、所謂知識は此なり、大學の誠は、其の意即ち實に其の識なり)とし、更に、「矢部曰知識詞也、按凡知識、記識、標識今人分入去二聲、古無入去分別、三者實一義也」(矢部に曰く、知は詞を識るなり、按ずるに凡そ知識、記識、標識は、今人入去の二聲に分つも、古は入去の分別無し、三者實に一義なり)とする。知識は〔*nu* sh〕、〔*nu* sh〕、記識は〔*ti* sh〕、標識〔*ti* sh〕の區別が現在ではある。

志字が中山王方壺の銘文や、侯馬盟書に見えるということは、志字は戦国期にはもう存していたと言えるし、識字は周代の格伯殷の銘文中に見ることが出来る。よってこの両字はその成立は当然源を異にするのであるが、それが同義の字として認識されるようになったのは漢代以後である。志はもともと心の趨向していく状態を意味したのであるが、それが詞を知るという意味での識が、詩序の云う志の之く所としての詩、それを為り、それを記述するという意味をも包含する語としての識と同意義の字として用いられるようになったのは恐らく、この語書が書かれた秦代の早期としてよいであろう。

(6)千里 本来長い途のり、広大な地域を表わす語である。《左傳・僖公三十二年》に、「師之所爲、鄭必知之、勤而無所、必有悖心、且行千里、其誰不知」(師の爲す所、鄭必ず之を知る、勤むるも所無ければ、必ず悖心有り、且つ千里を行くも其の誰か知らず)とある。千は《説文》に、「十百也、从十、从人」とある。高鴻緝の《中國字列》に、「大徐、从十、从人、小徐作从十、人聲、人聲、是也、从十、當爲从一、一、數之整也」(大徐本には、「从十、从人」とあるも小徐は「从十、人聲」に作る、人聲とするは是なり、「从十」は當に「从一」とすべし、一は數の整なり)とするのは恐らく間違いであろう。卜辞に見る千は明かに、人と十に従っているからである。「一、數之整也」という言い方は当時の学者達以后に生れた諸学に基づく考えで、その字体の原初的成立時には何の関りも持たないものである。里は《説文》に、「居也、从因、从土」とある。即ち人の住む所、日本語で言う所の村里である。しかし里には古代居住

人を管理する為の一制度としての役割りがあつた。《周禮・地官》に、「五家爲鄰、五鄰爲里」(五家を鄰と爲し、五鄰を里と爲す)とあり、また同じく《禮記・効特牲》に、「唯爲社事、單出里」(唯だ社事を爲し、單に里を出づるのみ)とあり、その鄭玄の注に、「二十五家爲里」とある。ここでは南郡の守騰が治めている地域全体を言う。

(7)籍 《説文》には、「簿書也、从竹、耑聲」とある。戸籍簿のことである。この戸籍簿にはその戸の人員及び構成以外にも各人の賞罰などが記されているような後代の檔案のようなものであつたのであろう。

(8)語書 この二字はこの文の標題に当るものであるが、一九七五年十二月に発掘された当初はこの二字が未発見であつたため、その標題は《語書》ではなく、その内容から、《南郡守騰文》と呼ばれていたのである。《單行本》の注には、「此二字爲簡背標題」(此の二字は竹簡の裏側に記された標題である)とあるが、初期段階でみつけれなかったということとは、相当判然としにくい字体が、或いはそうした場所に書かれていたのであろう。

語は《説文》に、「論也、从言、吾聲」とある。ここでは《釋名・釋言語》に、「語、叙也、叙已所欲説也」(語は叙なり、己の欲する所の説を叙するなり)とあるのや、《論語・鄉黨》に、「食不語、寢不言」(食するも語らず、寢するも言わず)とあるのに通ずる。つまり語り述べ叙すること、古代に於ては、述べ語ることの最も重要なものは歴史であつたから、《国語》の中に見える《魯語》や

《齋語》の内容は、それぞれ魯の歴史、齋の歴史になっているのである。

### 訳文

その責められる点の最も多い者は、役所の令・丞に申し上げ、令・丞が不正なるものと認定したなら、戸籍簿にその事実を書いて、千里四方に悪吏として指弾されるものとする。

### 附録

この釈文を作るに当って底本とした、文物出版社一九七八年十一月《睡虎地秦墓竹簡》睡虎地秦墓竹簡整理小組編の《語書》には極く簡単ではあるが説明がある。いまそれを参考とすべく原文と、訳文を掲げておく。

### 語書

《語書》发现于墓主腹部，在右手的下面。文书共有十四支简，文字分为前后两段。这十四支简简长和笔体一致，但后段的六支简简首组痕比前八支简位置略低，似乎原来是分开编的。后段有“发书、移书曹”等语，文意与前段呼应，可能是前段的附件。原有标题在最后一支简的背面。

南郡地区原来是楚国的地方。秦昭王二十八年（公元前279年）、命白起率军攻楚，“拔郢、邓五城，其明年，攻楚，拔郢、烧夷陵，遂东至竟陵”，在新占领的楚北部地区设置了南郡。《語書》是秦王政（始皇）二十年（公元前227年）四月初二日南郡的郡守腾颁发给本郡各县、道的一篇文告。文书中提到的江陵，就是楚国的旧都郢。这时，秦在南郡地方已统治了半个世纪，但当地的楚人势力还有很大影响，同时

### 六

楚国也在力图夺回这一地区。《编年记》所记“南郡备警”一事，发生在文书的前一年。文书的内容，也反映了当时政治军事斗争的激烈和复杂，是一篇珍贵的史料。

《語書》は墓主の腹部の下から発見され、右手の下あたりにあった。文書は全部で十四本の竹簡があり、文字は前後二段に分かたれていた。この十四本の竹簡は、その簡の長さや筆跡は一致しているが、後段の六本の竹簡の上段の紐の組みあとは、前段の八本の竹簡に比べてその位置はやや低くなっている。この簡巻が作成された頭初から別々に編成されたもののようである。後段には、「書を発布する、書を曹に移す」などの文句が見え、文意は前段と呼応しているから、多分後段は前段の附件なのであろう。もとの標題は最後の一簡の裏面にかかれていた。

南郡地区は本来楚の国の地方である。秦の昭王二十八年（紀元二七九年）、白起に命じて軍を率いて楚を攻めさせ、「郢と鄢の五城を抜き、其の明くる年、楚を攻め、郢を抜き、夷陵を焼き、遂に東のかた竟陵に至る」のである。そして新しく占領した楚の北部地区に南郡を置いたのである。《語書》は秦王である政（始皇帝のこと）の二十年（紀元二二七年）四月二日に南郡の郡守である騰がその郡の各县、道に発布した通達文である。この文中で江陵についてふれているが、これは楚の国の旧都の郢である。当時、秦は南郡地方においては、已に半世紀に亘って支配しているが、しかしその地方の楚人の勢力はまだまだ大きな影響力を持っており、同時にまた楚の

国自身も力でこの地方を奪回しようと思図していた。《編年記》が記している「南郡備警」の一事件は、この《語書》より一年前に発生したのである。この文書の内容は、当時の政治、軍事闘争のはげしさと複雑さを反映しており、一篇の極めて貴重な歴史資料となっている。

新編疾言へ積治難計既書衆所へ積  
陳所置所所へ積所所上取置止取故知此書不  
可不無所難所移書置其集へ吉所今書能  
止其置故多書留置難中其へ不不置其  
十里波所籍書止へ不置其

(一九九四年七月二十七日受理)